

日本人英語学習者はどのように英語詩の解釈を試みるか

西原 貴之 (県立広島大学)

キーワード：英語詩， 解釈， リーディング

1. 本発表の目的と背景

日本の英語教育のリーディング指導は高等学校までは説明文が中心となり、大学英語教育では TOEIC 対策が盛んになされている。一方で、学習者の専攻によっては、英語詩をはじめとした文学作品を英語で読むことが求められる場合がある（あるいは、他専攻であっても、学習者の英語力の拡がりを目指して授業で英語詩などを使用する場合もある）。依然として英語詩を活用した大学用英語教材の数は少ないが、英語教育学の中で英語詩に着目した研究の数は増えつつある（e.g., Hanauer, 2010）。

しかしながら、実際に英語詩を学習者に読ませてみると、どのように作品を読解したらよいか戸惑う学習者が多い。本発表では、これまでに英語詩をほとんど読んだことがない日本人大学生英語学習者がどのような情報をもとに英語詩の解釈を試みるかを調査する。この調査を通して、大学生英語学習者に英語詩の読解を導入する際の注意点について示唆を得ることを目的とする。

2. 調査

(1) 学習者

発表者の勤務校の国際文化学科に所属する日本人大学生英語学習者 32 名の協力を得た。調査参加者には、将来日本語を含んだ東アジア言語（文学）の専攻を希望する学習者、社会学の専攻を希望する学習者、英語学・英語文学の専攻を希望する学習者が混在しており、その英語力にはかなりのばらつきが見られる。また、事前アンケートで調査参加者の英語詩を読んだ経験をたずねたところ、15 名は英語詩を読んだ経験がなく、読んだことがあると答えた 17 名も平均 3.6 篇しか読んだことがないと回答した（ちなみに日本語の詩については 30 名が読んだことがあるとし、平均で 18.2 篇程度の作品を読んだことがあると答えた）。

(2) 調査材料

まず、英語詩および日本語詩を読んだ経験をたずねるアンケートを作成した。質問項目は、英語詩を読んだことがあるか、あるとすれば何篇程度読んだことがあるか、日本語詩を読んだことがあるか、あるとすれば何篇程度読んだことがあるか、という 4 項目であった。

次に本調査で用いる英語詩として、アメリカ詩人 Robert Frost の “Stopping by Woods on a Snowy Evening” を採用した。この作品を調査材料としたのは、英語文化圏で有名な詩であるということと、英語詩によく見られる言語的特徴が含まれているという点（脚韻、頭韻、反復、韻律、内的逸脱、外的逸脱、意味論的曖昧性、など）による。なお、事前アンケートと英語詩は同一用紙上に載せた。

(3) 調査手順

発表者が担当する 1 年次英語リーディング科目「英語Ⅳ」という科目の中で実施した。調査参加者に調査の趣旨を説明し、了解を得てから授業中に調査用紙（事前アンケートと英語詩を印刷した用紙）を一斉に配布し、調査を実施した。調査参加者は 4 項目の事前アンケートに答えてから、英語詩の解釈を行った。なお、調査参加者には「次の作品は、アメリカ詩人 Robert Frost の “Stopping by Woods on a Snowy Evening” という作品です。この作品で作者が表現しようとしている事柄を理解する際に、重要だと思う箇所（語、句、文、連、など）はどこだと思いませんか。3 箇所以内で挙げてください。また、その箇所を選んだ理由も記述してください。」という指示を出した。調査参加者は、作品内で重要だと思う箇所に印を付け、その横にその箇所を選んだ理由を書いた。調査参加者は 25 分でこの作業を行った。また、調

査の最後に、この作品の理解度をパーセンテージで答えた。

調査終業後、調査参加者が印を付けた箇所とその理由を別のカードに転写し、カテゴリー分類を行った。その結果、3つの上位カテゴリーと、その上位カテゴリーを更に区分した10の下位カテゴリーを得た。次に、本調査には参加していない別の大学生英語学習者2名に各カードがそれぞれどの下位カテゴリーに属するかを分類してもらった。発表者と2名の協力者は独自にカードの分類を行い、分類結果が一致しなかったものについては話し合いによって、どの下位カテゴリーに属するかを最終決定した。なお、発表者と2名の協力者のカテゴリー分類一致率は78.3%であった。

3. 結果と考察

各カテゴリーの詳しい説明と、その例については紙面の都合上ここでは割愛し、発表時に提示する。ここでは、各カテゴリーの分類結果のみを示す。1つ目の上位カテゴリー(A)は「既習の読解技能の適用」であり、このカテゴリーはさらに5つの下位カテゴリーからなる。それらは、「説明文の文章構成の知識を転移させている例」(A-1)、「作者の主張に相当すると(学生が)考えている箇所に注目している例」(A-2)、「コンテキストに関わる情報に注目している例」(A-3)、「代名詞が指す人物や登場人物間の関係に注目している例」(A-4)、「作品の題名に含まれる語(または関連した語)に注目する例」(A-5)、の5つである。2つ目の上位カテゴリー(B)は「反復表現への注目」であり、このカテゴリーは更に、「同一文の反復に注目している例」(B-1)、「脚韻に注目している例」(B-2)、「作中の同一語句に注目している例」(B-3)という3つの下位カテゴリーからなる。3つ目の上位カテゴリーは「一般言語知識の活用」(C)であり、更に「語の意味のニュアンスに注目している例」(C-1)と「一般的な文法知識を参考にして特定の箇所に注目している例」(C-2)という2つの下位カテゴリーから構成されている。以下の表は、各カテゴリーが観察された回数をまとめたものである。

表1. データのカテゴリー分類一覧

A						B				C		
A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	合計	B-1	B-2	B-3	合計	C-1	C-2	合計
5	7	5	4	8	29	19	6	5	30	6	4	10

ここでは紙面の都合上、本発表で中心となる点の指摘にとどめる(より詳しい考察は発表当日に行う)。本調査の結果から、以下のことが指摘できる。

1. 調査参加者の多くは、既習の読解技能を適用して読解を試みている
2. 調査参加者は作品の中で比較的目立つ反復表現には敏感に反応しており、これらの表現が作品解釈の上で重要な役割を担っていると考えているようである
3. ただし、調査参加者は非常に限られた言語的特徴にしか注目していない

しかしながら、調査参加者が調査後に報告した理解度の平均値は33.5%であり、調査参加者が作品の解釈に有用と考えた点への着目は読解の成功を導いてはいないようである。発表当日には、本調査の結果を踏まえ、英語詩を読んだ経験があまりない大学生英語学習者の英語詩読解の指導に際して、以下のような提言を行う予定である。

1. 英語詩を読解する際には、これまで培ってきた読解技能に囚われすぎないように注意するよう指導する
2. 反復表現への着目をどのように解釈に結び付けていくか、その筋道を示す
3. 頭韻や外的逸脱など、テキスト内の幅広い言語表現への注意を喚起する

4. 引用文献

Hanauer, D. I. (2010). *Poetry as research: Exploring second language poetry writing*. Amsterdam: John Benjamins.